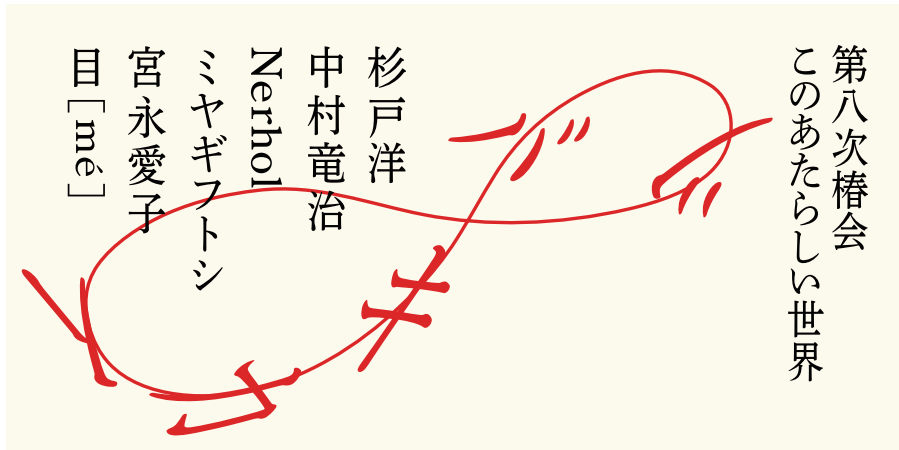




SHISEIDO GALLERY

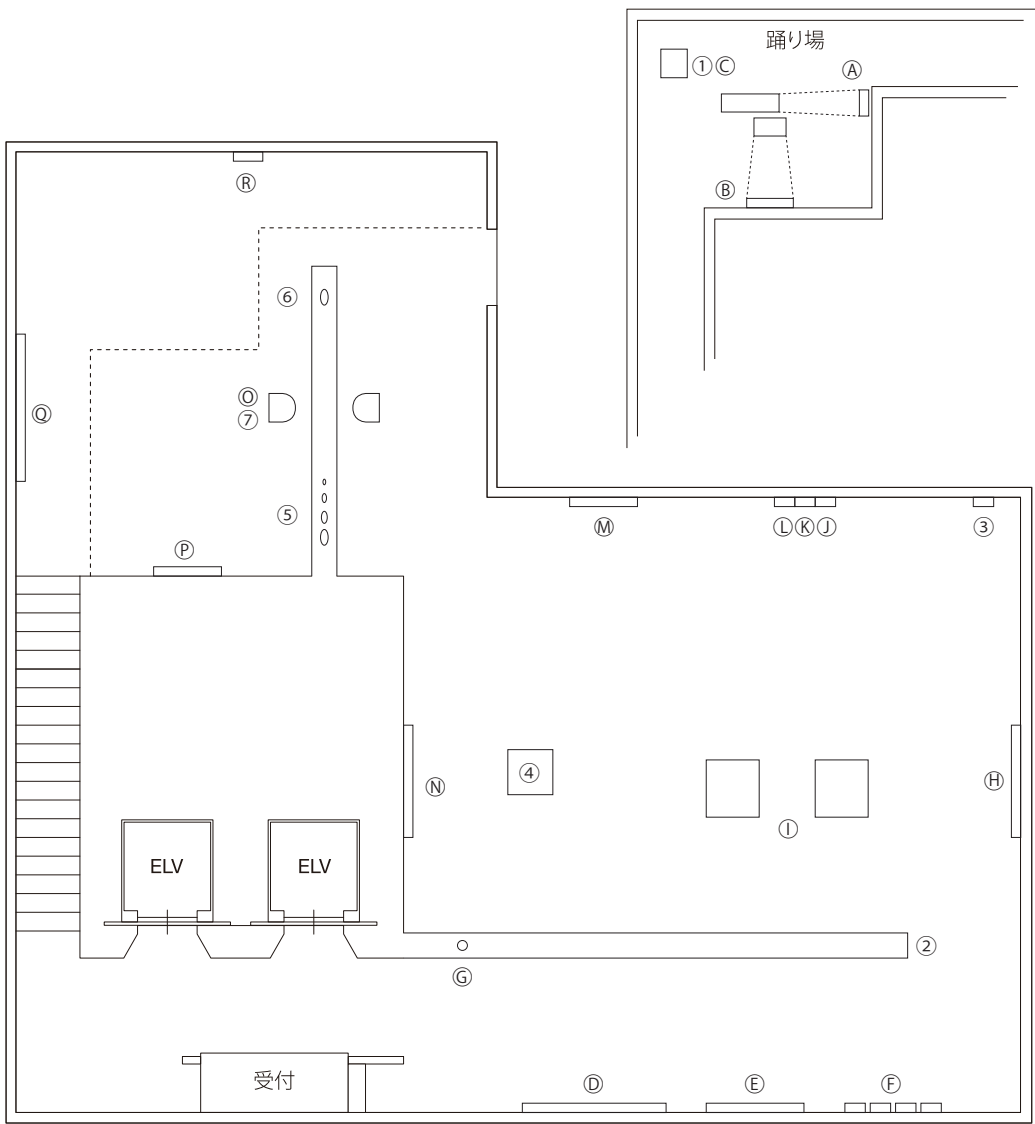
会期：2021年6月5日（土）～8月29日（日）

8月16日（月）～23日（月）まで夏季休暇

平日：11：00～19：00 日・祝：11：00～18：00

毎週月曜休（月曜日が祝日にあたる場合も休廊）

＊新型コロナウイルス感染状況によりスケジュール
および内容に一部変更が生ずる場合があります。



ミヤギフトシ（みやぎふとし）

1981年、沖縄県生まれ。2005年、ニューヨーク市立大学卒業。現代美術作家としての主な個展に「In Order of Appearance」miyagiya (2021年)、「How Many Nights」ギャラリー小柳 (2017年)、「American Boyfriend: Bodies of Water」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA (2014年)など。2012年にスタートしたプロジェクト「American Boyfriend」では、沖縄で沖縄人男性とアメリカ人男性が恋に落ちることの関係性等をテーマに、作品制作やトークイベントの開催などを行なっている。自身のアイデンティティや出身地の沖縄、アメリカ文化など題材とした映像や写真作品だけでなく、小説も発表。

- ① 《消えた香り/書かれる手紙》2021年
セレナーデのボトル、オノト万年筆、紙にインク（月夜）

選んだ収蔵作品：④ 伊藤 存《みえる生き物（銀座）》、⑥ 《みえない土地》、⑨ 資生堂《香水 セレナーデ》

中村竜治（なかむら りゅうじ）

建築家。1972年長野県生まれ。東京藝術大学大学院修了後、青木淳建築計画事務所を経て、2004年中村竜治建築設計事務所を設立。主な作品に、「へちま」ヒューストン美術館、サンフランシスコ近代美術館収蔵（2010、2012年）、「JINS京都寺町通」（2016年）、「神戸市役所1号館1階市民ロビー」（2017年）、「FormSWISS」東京・神戸展展示空間（2020、2021年）など。資生堂との作品に、資生堂ギャラリー「BEAUTY CROSSING GINZA ～銀座＋ラ・モード＋資生堂～」展展示空間（2016年）、「資生堂ビューティ・スクエア」（原宿）店舗空間（2020年）など。主なグループ展に、「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」東京国立近代美術館（2010年）、「反重力」豊田市美術館（2013年）など。主な受賞に、第6回京都建築賞優秀賞（2018年）、第32回JIA新人賞（2020年）など。

- ② 《関係》2021年
木材、合板、パテ、塗料など

選んだ収蔵作品：① 三輪美津子《E B B A – No.9》、⑤ 《E B B A – No.4》、⑥ 《四つ眼の池 I～IV》シリーズ「E B B A」から、⑨ 内藤礼《ひと》

Nerhol（ネルホル）

田中義久と飯田竜太の二人からなるアーティストデュオ。連続撮影をした数百枚のプリントを束ね、彫り込むことで生まれる立体作品を発表後、ポートレート、街路樹、動物、水、あるいはネット空間にアップされた記録映像等、様々なモチーフを選びながら、それらが孕む時間軸さえ歪ませるような作品を制作。そこでは一貫して、私たちの日常生活で見落とされがちな有機物が孕む多層的な存在態を解き明かすことを試みている。主な個展「Interview, Portrait, House and Room」Youngeun Museum of Contemporary Art、韓国（2017）、「Nerhol Promenade/プロムナード」金沢21世紀美術館（2016）。2020年VOCA賞受賞。

- ③ 《オニノゲシ》2021年
インクジェット・ペーパー

選んだ収蔵作品：⑧ 畠山直哉《Findling -Klein Helgoland, Sassnitz, Rügen》、⑩ 《CAMERA/Grand Howard Hotel #920, Qingxi 9 January 2006》、⑪ 《赤瀬川さんのアトリエ》より

宮永愛子（みやなが あいこ）

1974年生まれ。京都府京都市出身の現代美術家。第3回シセイドウアートエッグ出身。京都造形芸術大学美術学部彫刻コース卒業。東京藝術大学大学院美術学部先端芸術表現専攻修了。平成18年度文化庁新進芸術家海外留学制度によりエジンバラ（イギリス）に1年間滞在。第22回五島記念文化賞美術新人賞を受賞し、2011年からアメリカ・中南米で研修。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。主な個展「うたかたのかさね」京都市文化博物館（2020年）、「宮永愛子：漕法」高松市美術館（2019年）。2019年度文化庁芸術選奨美術部門新人賞受賞。アートエッグから初めての椿会メンバー。

- ④ 《message 2019/2021》2021年
ナフタリン、石（陶片）、ミクストメディア

選んだ収蔵作品：⑨ 畠山直哉《Findling -Schwanenstein, Lohne Rügen》、① 《CAMERA/The Oriental Bangkok #405 16 January 1996》、⑧ 《CAMERA/Hotel Terme di Saturnia #209 6 June 1996》、① 青木野枝《水のとどまるところ》

杉戸 洋（すぎと ひろし）

1970年愛知県生まれ。92年、愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒業。小さな家や、空、舟などのシンプルなモチーフを好んで描き、繊細かつリズムカルに配置された色やかたち特徴。2016年の個展「杉戸洋——こっぽとあまつぶ」（豊田市美術館）では、建築家・青木淳とコラボレーションし、会場を構成したほか、17年の東京での美術館初個展「杉戸洋 とんぼ と のりしろ」（東京都美術館）では前川國男が設計した美術館の展示空間と呼応するような幅15メートルの大作《module》（2017）を発表した。武蔵野美術大学美術館で2021年開催の「オムニスカルプチャーズー彫刻となる場所」では、会場構成を担当。平成29年度（第68回）芸術選奨、文部科学大臣賞受賞。

- ⑤ 《おきもの》2021年

選んだ収蔵作品：① 畠山直哉《赤瀬川さんのアトリエ》より

目[mé]（め）

目[mé]は、日本の現代芸術活動チーム。不確かな現実世界を、私たちの実感に引き寄せようとする作品を展開。手法やジャンルにはこだわらず、展示空間や観客を含めた状況、導線を重視。創作方法は、現在の中心メンバー（アーティスト荒神明香、ディレクター南川憲二、インストーラー増井宏文）の個々の特徴を活かしたチーム・クリエイションに取り組み、発想、判断、実現における連携の精度や、精神的な創作意識の共有を高める関係を模索しながら活動している。資生堂ギャラリー『たよりない現実、この世界の在りか』（2014）や、「目[mé] 宇都宮美術館屋外プロジェクト『おじさんの顔が空に浮かぶ日』（2013-14）、さいたまトリエンナーレ2016への参加、千葉市美術館『目[mé] 非常にはっきりと わからない』（2019）などが話題を呼んだ。

- ⑥ 《matter α #Ⅶ》2021年
砂、石、岩の粒子、など

- ⑦ 《Position》2021年
※作品《ハグ2》は、定期的にスタッフによって動かされている可能性があります

選んだ収蔵作品：⑨ 赤瀬川原平《ハグ2》から椅子2脚、⑩ 《ハグ1》、⑧ 《模型千円札Ⅲ》

収蔵作品とアーティスト

伊藤存

1971年大阪府生まれ、京都在住。1996年京都市立芸術大学美術学部卒業。2003年にワタリウム美術館で個展「きんじょのはて」を開催。主なグループ展：2006年「3つの個展：伊藤存、今村源、須田悦弘」国立国際美術館；2009年「Louisa Bufardeci & Zon Ito」シドニー現代美術館；2010-11年「プライマリー・フィールドⅡ： 絵画の現在 ― 七つの〈場〉との対話」神奈川県立近代美術館 葉山；2011年「世界制作の方法」国立国際美術館、2012年「別府のミミック」(KASHIMA 2012 BEPPU ARTIST IN RESIDENCE 滞在制作成果展)；2013-14年「Now Japan」Kunsthal KAdE (アメルスフォールト；2013年「磯部湯 画廊／磯部湯活用プロジェクト」旧磯部湯（前橋）；2015年「知らない都市―INSIDE OUT」京都精華大学ギャラリーフロール；「山／完全版のいきいきセンター」京都市立芸術大学ギャラリー@KUCA；「SOMETHINKS」アートラボはしもと；2015-2016年「Two Sticks」Think Tank Lab Triennale, ヴロツワウ、ポーランド；2016 - 2017年「この世界の在り方 思考/芸術」芦屋市立美術博物館；2020年「青木陵子＋伊藤存展 変化する自由分子のWORKSHOP」ワタリウム美術館；2021年「日常のあわい」金沢21世紀美術館など。第七次椿会メンバー

- ㉔ 《みえるいきもの（銀座）》2016年
銀座に住む、人以外の生き物のかたちのメタモルフォーゼ。

- ㉕ 《みえない土地》2016年
銀座のみえる土地での生き物探索に刺激されたみえない土地。＊2点とも映像インスタレーション

三輪美津子

1958年名古屋市生まれ、名古屋市在住。1981年愛知県立芸術大学デザイン科卒業。1995年VOCA展’95でVOCA賞受賞。1996-97年にはフィリップ・モリス財団からの奨学金によりクンストラー・ハウス・ベタニアン（ベルリン）に滞在。1998年にはスウェーデン国際アーティストプログラム (IASPIS) のゲストアーティストとしてストックホルムに滞在。主な個展：2014年「imaginary Number」Longhouse Projects (New York)；2013年「color & Gravity」1223現代絵画（東京）；2010年「SKELTON」Gallery HAM (名古屋) など。主なグループ展：2010-11年「プライマリー・フィールドⅡ： 絵画の現在 ― 七つの〈場〉との対話」神奈川県立近代美術館 葉山、2011年「現代絵画の展望 24の時の瞳」東京ステーションギャラリーなど。第五次椿会メンバー。

- ㉑ 《E B B A – No.9》2003年
- ㉒ 《E B B A – No.4》2002年
- ㉓ 《四つ眼の池 Ⅰ～Ⅳ》シリーズ「E B B A」から 2003年
＊すべて油彩、キャンバス

《E B B A》は、友人のスウェーデン人の作家の自撮り写真をもとに、フォーカスを変えたトリミングで描かれたシリーズ。《四つ目の池》は、《E B B A》の部分を切り取ったように描かれている。小作品についての考察がテーマとなった「椿会展2004」に出展された。トリミングや構図は、描く前にパソコン上で周到にシミュレーションされている。

内藤礼

1961年広島県生まれ、東京在住。1985年武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。1991年、佐賀町エキジビット・スペースで「地上にひとつの場所を」を発表。1997年には第47回ベネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館にて同作品を展示。主な個展：1995年「みごとに晴れて訪れるを待て」国立国際美術館；1997年「Being called」カルメル会修道院（フランクフルト）；2005年「返礼」アサヒビール大山崎山荘美術館；2007年「母型」入善町下山芸術の森 発電所美術館；2009年「すべて動物は、世界の内にちょうど水の中に水があるように存在している」神奈川県立近代美術館 鎌倉；2014年「信の感情」東京都庭園美術館、2018年「明るい地上には あなたの姿が見える」水戸芸術館現代美術ギャラリー（茨城）、2020年「うつしあう創造」金沢21世紀美術館（石川）など。パーマネント作品として2001年「このことを」 家プロジェクト『きんざ』(直島)、また2010年には豊島美術館にて「母型」を発表。2015年には30年にわたる仕事を包括した作品集『内藤礼 | 1985-2015 祝福』（millegraph）が刊行された。2017年フランス、パリ日本文化会館で個展「émotions de croire」を開催。第60回毎日芸術賞（2019年）、第69回芸術選奨文部科学大臣賞受賞（2019年）受賞。第七次椿会メンバー

- ㉔ 《ひと》2012年
木にアクリル絵の具

見たものを希望だと信じる「ひと」、2011年 6 月より制作を開始した作家にとってはじめての人体像。第五次椿会初回の「椿会展2013」では台座の上にとった「ひと」がひとり壁面に展示され、2014年に「ひと」は床に立ち、2015年にはふたり、2016年にはこれまでの「ひと」をふくむ21人と増えてゆき、最終回の2017年にはまたひとりに戻り、初回と同じ場所に展示された。

畠山直哉

1958年岩手県陸前高田市生まれ。東京在住。筑波大学芸術専門学群にて大辻清司に師事。1984年に同大学大学院芸術研究科修士課程修了。2001年に中村政人、藤本由紀夫とともにベネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館にて展示。2011年に東京都写真美術館で個展「畠山直哉 ナチュラル・ストーリーズ」（平成23年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞）を開催。2012年、ベネチア・ビエンナーレ国際建築展の日本館に参加（国別参加部門金獅子賞受賞）。2016 - 2017年、せんだいメディアテークで個展「畠山直哉写真展 まっぶたつの風景」を開催するなど、国内外の数々の個展・グループ展に参加。第七次椿会メンバー

- ㉔ 《Findling -Klein Helgoland, Sassnitz, Rügen》2009年／2015年
- ㉕ 《Findling -Schwanenstein, Lohne Rügen》2009年／2015年
＊ 2点ともラムダ・プリント

タイトルの「Findling（漂石）」は、元々ドイツ語で「拾われ子」の意味だが、2万5千年前の氷河の拡大に伴って遠くの山から運ばれてきた巨大石のこと。ドイツ各地に存在する「漂石」を撮影したシリーズ。

- ㉑ 《CAMERA/The Oriental Bangkok #405 16 January 1996》1996年
- ㉒ 《CAMERA/Hotel Terme di Saturnia #209 6 June 1996》1996年
- ㉓ 《CAMERA/Grand Howard Hotel #920, Qingxi 9 January 2006》2006年
＊3点ともゼラチン・シルバー・プリント

カメラはもともとラテン語で、「部屋」や「寝室」という意味を持つ。イタリア語では今でもそのままの意味で使われ、ホテルの部屋も「カメラ」と呼ばれている。作者が仕事や旅行であちこちを訪れた際、宿泊したホテルの部屋の、ランブシェードを通して天井や壁にあたる明かりを捉えたシリーズ。

- ㉔ 《赤瀬川さんのアトリエ》より 2017年
- ㉕ 《赤瀬川さんのアトリエ》より 2017年
＊2点ともCプリント

2017年1月に、同じ第七次椿会メンバーだった、故赤瀬川原平氏のアトリエを訪ね、アーティストの作品や素材、コレクションなどを撮影した。

青木野枝

1958年東京都生まれ。1981年武蔵野美術大学彫刻科を卒業、1983年同大学大学院造形研究科（彫刻専攻）を修了。2000年、平成11年度（第50回）芸術選奨文部大臣新人賞を受賞。2014年に第55回毎日芸術賞受賞。2017年には中原悌二郎賞、2021年には芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。主な個展：2019年「青木野枝 霧と鉄と山と」府中市美術館（東京）；「青木野枝 霧と山」霧島アートの森（鹿児島）；「青木野枝 ふりそそぐものたち」長崎県美術館（長崎）；2012年「青木野枝 ふりそそぐものたち」豊田市美術館（愛知）；2000年「青木野枝展―軽やかな、鉄の森」目黒区美術館（東京）など。主なグループ展：2018年「水と土の芸術祭2018」（新潟）；2015年「越後妻有アートトリエンナーレ2015」（新潟）、2014-2015「ロジカルエモーションー日本現代美術展」Museum Haus Konstruktiv（スイス）、Museum of Contemporary Art in Krakow MOCAK（ポーランド）、Kunstmuseum Moritzburg Halle〈Saale〉（ドイツ）；2010年「瀬戸内国際芸術祭2010」など。第五次椿会メンバー

- ㉑ 《水のとどまるところ》2005年
鋳造ブロンズ

「いま気になっているのは、風景のなかの水のありかた。世界のなかの水のありよう。それは私のまわりをとりかこんだり、上方に逃げて行ったり、手のなかにあらわれたりする。自分のなかにある、足の下にある、鉄のなかにある、どこにでもある、そして、どこにもない水。」
青木野枝
《水のとどまるところ》が出品された「椿会展2005」カタログより

赤瀬川原平

1937年横浜市生まれ。2014年逝去。画家。作家。路上観察学会会員。前衛芸術家。美術史に残る千円札裁判の被告、イラストレーターなどを経て、1981年『父が消えた』（尾辻克彦の筆名）で第84回芥川賞受賞。1989年には映画『利休』の脚本を勅使河原宏と共同執筆し、日本アカデミー賞脚本賞受賞。著書に『新解さんの謎』（文春文庫）、『超芸術トマソン』『老人力』（以上、ちくま文庫）、『世の中は偶然に満ちている』（筑摩書房）、『ライカもいいけど時計がほしい』（シーズ・ファクトリー）など多数。「老人力」は1998年の流行語となる。近年の主な展覧会：2008年「氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと美術 1960's-70's」うらわ美術館；2010年「赤瀬川原平写真展―散歩の収穫」横浜市民ギャラリーあざみ野；2012-13年「TOKYO 1955-1970／新しい前衛芸術」ニューヨーク近代美術館；2013年「ハイレッド・センター：『直接行動』の軌跡」名古屋市美術館、渋谷区松濤美術館；2014年「尾辻克彦×赤瀬川原平 文学と美術の多面体展」町田市民文学館ことばらんど；2014-15年「赤瀬川原平の芸術原論展―1960年代から現在まで」千葉市美術館、大分市美術館、広島市現代美術館。第七次椿会メンバー

- ㉑ 《ハグ 2》から椅子2脚 2013年
家具

23年前に自宅を新築した際、それまで使っていた既製品の家具がそぐわなかったため、新しい家の雰囲気に合わせて削った。2013年の椿会展のために新たに削り直している。作品タイトル「ハグ」は、「家具」や「虚飾を剥ぐ」などという言葉、また英語で「抱きしめる」という意味の「ハグ」とかけている。

- ㉑ 《ハグ 1》2013年
クラフト紙にインクジェットプリント

1960 年代に制作した千円札をモチーフにした作品を制作。作家にとって、それが自分が芸術家と意識した初めての作品であった。今回は、当時作った千円札の印刷作品をばかして写真に撮り、襖サイズに拡大して印刷しました。

- ㉒ 《模型千円札 Ⅲ》1963年
紙に印刷

千円札裁判のきっかけとなった作品のひとつ。これを用いて様々な梱包作品が制作された。《ハグ 1 》はこの作品をもとにつくられた。